詠歌大概抄　上

543
エ
8
17

詠歌大概

情以新為先（求人未詠之心詠之）詞以舊可用（詞不可出三代集新古今古人歌同可用之）近代之人所詠出之心詞雖一句謹可除棄之（七八十年以来之人歌所詠出之詞努々不可取用之）於古人歌者多以其同詞詠之已為流例 但取古歌詠新歌事 五句之中及三句者頗過分無珍氣 二句之上三四字免之 猶案之以同事詠古歌詞無念歟（以花詠花 以月詠月）以四季歌詠戀雜歌 以戀雜歌詠四季歌 如此之時無取古歌之難歟

543
エ
8

九州大學圖書

九州大學圖書
昭和24.7.13
184066

詠歌大概

風躰可效堪能先達之秀歌（不論古今遠近見宜歌可效其体）

詠之　詞以舊可用（詞不可出三代集）

所詠出之心詞雖一句謹可除棄之（七八十年以来之人所詠出之心詞努々不可取用之）

於古人歌者多以其同詞詠之已為流例但取古歌詠新歌事五句之中及三句者頗過分無珍氣二句之上三四字免之猶案之以同事詠古歌詞頗無念歟（以花詠花以月詠月）以四季歌詠戀雜歌以戀雜歌詠四季歌如此之時無取古歌之難歟

543
エ
8

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭24.7.13
184066

あしひきの山時鳥　みよしのゝ山
久方乃月乃桂　郭公なくやさつき
如此之類雖何度不憚之
年の内に春はきにけり　月やあらぬ春や昔
さくらちる木のしたかせ
ほのぼのとあかしの浦
此等歌雖二句更不可詠之
常観念古歌之景気可染心殊可見習
者古今伊勢物語後撰拾遺三十六人集之
内殊上手歌可懸心（人丸貫之忠岑伊勢小町等之類）雖非和歌
之先達時節之景気世間之盛衰為知物由
白氏文集第一第二帙常可握翫（深通和歌之心）和歌無師匠
只以旧歌為師染心於古風習詞於先達者誰
人不詠之哉

詠歌大概
此抄作者
京極黄門定家卿
此抄の発起
後鳥羽院第七皇子尊快法親王　梶井宮
此抄の時代

あしひきの山時鳥　みかしの山

人の見る住の桂　新古今やさつ集
然して其の詠歌の此度木(?)偏(?)して
ちりぬれはまたさきまとり　住や何も其集ある
さくらちれ花のくも(?)
うのくもにしみの花

然詞二句更不可讀之

常観念古歌之景気可染心殊可見習者

古今伊勢物語後撰拾遺三十六人集之

内殊上手歌可懸心　人丸貫之忠岑伊勢小町等類

雖非和歌之先達時節之景気世間之盛衰為知物由

白氏文集第一第二帙常可握翫　深通和歌之心　和歌無師匠

只以旧歌為師染心於古風習詞於先達者誰

詠歌大概略
[illegible]

詠歌大概

此物作者
京極黄門定家卿

此物の発起
・後鳥羽院第七の宮子梶井親王

梶井宮

此物の時代

ころは 天保弐年壬午 蕣生 僕名 平…

此枚拄井文ニ言也とぞの由也行の林まの寸莫則
其後親主此かる也 極も此枚庵睡乃足庭ま
得て書遠ゐるの由哉く尤者後乃るすへし
貝直哉土年六十一歳ニ 彼なりし様のるす

詠

説文ニ歌也 増韻ニ詠者ハ謳吟之貌ハ咏と日偏ニて
うたふ
書文偏との字ハ咏とも書とあり

歌

説文ニ詠之 徐氏の注ニ長く言を引ていふなり
誦するやといへり 釋名ニ云本ニ人の聲を歌といふ
歌は柯之聲に似て咏するなり 草木に柯葉ある
ごとし 又樂ニ合するを歌と云なり 和漢…ニ
深氏此中ね東海波に舞ひ踊り時詠をうたひ踊るよしと
あり 詩のこゝろを…樂と云なり
詠歌乃二字に平意として 詠ハ説文ニ歌之
増韻ニ詠者ハ謳吟之 謳吟ハうたひ ぎんずるをいふ 歌ハ説文ニ
詠之 徐氏の云發言ニして誦するにいふとあるの聲
此注呉曲同之
井蛙に云ハくことのはにて詠じもちゐるものとなりて詠ずる
あられまで字明ゆるのあるなれ しりとなり詠歌といへり

くさはつきうくらみてしあやしききこゆるなり
尚書に歌永言と云これ歌の字の偏つくりは
可とくり言と永をかきたるによりて歌也詩は
志之所之也在心為志発言為詩情動於
中而形於言言之不足故嗟嘆之嗟嘆之不足故
永歌之永歌之不足不知手之舞之足之蹈之
也　総而毛詩の序に源序とし二字を卑之
之にて用之ふ用る歌　釈名云人の声を歌と云歌
は柯也草木の柯葉あるかことしといへは人の声の
本は柯葉あるかことくて其本ねになりつきれは草木の
ものにすなはち枝を生し葉をのへしむるは花実
を結ふ則皆是草木の上の歌也とくして風雅の
詠吟をあらはしえらさる故に草木の柯葉より花実を
ひらかるにもとしく歌は言を永くすとて君にもあ
顕はれ亦は歌と云は是を我はうすを述ると乃
其皆声をあらはし分論心を堅くいふにあり其は
まこと其出る声をして古今序に花に鳴鶯水に
すむ蛙の声をきけはいきとしいけるものいつれか歌
をよまさりけるといへり鶯は鶯のさま蛙は蛙のさまを
よむ只今自然の声を況や人倫をや眼にみ

日真名序云 夫和哥者託其根於心地発
其華於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷
哀楽相変感生於志詠形於言云云
昭明太子文選序 若其記一事詠一物風雲草木
之興魚虫禽獣之流推而廣之不可勝載矣
法華経分別印懐不ま念以千萬偈歌詠讃嘆
とあるし仏菩薩乃偈といふハ別之歌辞也
塵とよふし別之改

和歌之濫觴事

神代より始まりて世々に伝不同にして其の理明らかなれは
されは古今序にもそのやうをしるしおかれたり
新古今序にて神世七代時質人淳情欲無分
とあり

上古まてハ哥はことはすくなくして人の心
あつくなさけ深くしてその世の哥にてハふかきこと
さる故まことの哥なりし思ふ心のへあらはさむためなれは
哥のみを詠し事たり今の哥はすくなくそれなれは
人のなさけのあさくなりかゆゑなり三十一字の詠を
素盞烏尊出雲の八重垣の哥より始まりさ
れし古今序云 速千素盞烏尊よりそ出雲

閑将首三十一字詠之と同継若序にもあり
凡三十一字を肝要とするは長歌よりは反歌とて長歌
をつゞめて略したる也長うた短かうた混じたる文
鍵歌混本なるべし
漢朝にても漢の高祖大風歌に　大風起兮雲飛揚威
加海内兮帰故郷　安得猛士兮守四方　項羽をたい
らげて豊沛に帰り父老とあつまり置酒燕飲
の時に志をのべてうたはれし也文字数すくなくて
一節ちがふものなる是歌のごとくし
薤露蒿里と云し挽歌此歌是）薤露は王公貴
人乃死去乃時送葬にうたふ歌）蒿里は士大夫庶人の
野送にうたひし挽歌は万葉集などにみえたるを
以て見の歌此類なり

大概

一　繁　集韻云大繁は大率也率はおほむねとよむ又いひ
きそとしもよむも数段大綱のひつくりに也史記
伯夷ノ伝に其文辞不少概見何哉とあり
索隠ノ注に概は略也と云の義也といへり依て大概

域

とまてゝか概とゝ云てあほむねとゝうむる　文選序
ま概見横籍旁出子史にとゝと　此概ハ大略とゝ云
挽也ゝとには概の一字計とかほむねとゝむ之子史
彖子ハ孟子　荘子　老子　列子　荀子　楊子　呉子
孫子ホ此流布ル史ハ　史記　左伝
漢書　通鑑　唐史　宋史　元史乃頽也
孝経　天子章云　蓋天子之孝也　注　蓋者秝古
辛較之辞也又陳其大綱則綱目必挙天子
之孝道不出此域也　実
孝経述義云辛較者按概大略之謂也以天子孝

有後漢式総挙其大略故言蓋也者謂之数端
不定之辞也伝曰挙一綱而万目張乃故陳其綱
大綱則綱目必挙天子孝道不出此之大域也此
書の大意をゝ云也こ手
此下ハ同前ノ事也　別ノ目
天台の四教とて大綱とふすか之四教ハ蔵通別円之
ともむへりゝ頓末の教を綱目と名つく云心ハ円
教の大綱と勤むれは蔵通別の大綱ハ三外ホ教
此大綱ま云てゝ乃義也　後教の綱とゝ思ゝて法
界此海をとゝけり人天の魚を漉く涅槃乃
岸まてゝとゝ云也これ也

同此書乃題号大かたを云んの理は何也大概と云乃
字限いかん何

答云 段意によくいはゝ世俗に云十の物八ツ九ツ
のことし大綱をたとへを以いはゝ家との庭訓の事
杖かほどの綱乃首(綱目)にたとへは此書に詠歌乃故
実大略須ひる所に大綱なるへし

詠歌大概と云題号の事

詠哥大概の四字は平意にしていはゝ哥に讀て
大むねかに讀くと云儀也家にも和哥此を
へをかなるものかほと名とて此稿は其一〔上〕欽大の
ただ大むねはのつり大綱は綱の元目此はしたりし
物の口も堪能も此書のおもむきあつまりしきこゝは要とす此稿
に生しこゝろされてこれとも此一紙乃稿に出さるなり
家との髄脳とて法家よりあたへ和哥の稿
物又或は病のはたしに制し禁制のありのことくす
し十病の薬のためのゆるさぬ和哥の紀極かるを
此稿は中すこしつゝ家やなるをとへむねいろくを返
至極一代此和哥乃稿物此一冊に決定すれ乃二
条家乃宝を稲と云は京極中納言定家
の書かれしものと本とたとへ申すに定家卿にはをさて古今

を本として何事もせられし故從圖乃
之所貫之ヵ養質本は古ととして一畢
のやうな世人思へり玄宗あくして皇なき由
と言へり是を故いふ家何の本をとこもしると記
汝おとしろめて取捨てん見とかく拂其乃
家は源なと奥書をわすれたり一二年家
をあらん事ハ家の殊に貴門以前の事ハ
用
（きよ何もかまや
情以新為先　求人未詠之心詠之
流文ハ情ハ人之陰氣有欲者　言ハ人の陰乃

氣の物ハ感じてかなるもし
白虎通ニ曰ク六情乃何ぞあり喜怒哀樂愛悪
謂之七情といふは喜怒哀楽愛悪六情ハ欲
を加へり白虎通ニ六情といふハ欲の字ハ陰
氣乃欲といふハ情乃する所なり六ハ何するが故ニ
其る欲乃字をかへたるは仁義礼智乃是信
也皆何れにしても五常の教ハ作れり見んとて七
情ハ喜怒哀思悲恐驚としあり
ハ物に不行物に情也とも流きて　性理字
義ニ云　情ハ性之動本性不動是性之體而

遂通を悟し欲便を悟し又理也
禅語をもて云ふ時は一仏性とも此とも各別の境
界なれとも仏性一致と見る時は見解なる事も情は心
意識の三差別なり
心を本来本有不動の心王なり
釈名は心は識也所識微無不貫也言ふ心は
かくこまかにわかちてはなし心のかたちも又あさきなり
涅槃経は仏法の根本として十方に通貫すと云へり
曽子か一以貫之といへり是程のことなりや
又朱晦庵かいはく理は奥にして万事に通ずる
ことといへるも同し心なり
心地観経 第八観心品 唯心法は一切衆生の主たり
心は本来塵穢にそまらぬなれとも仏法の貪瞋
癡にそまりて三世の法においては説くことと
する也此心そ己に滅して未来の心は未至
現在の心は住せす法法の因性も不可得なり法
法のかたちも不可得なり法法中間をへて是を得る
なり仏法は本来形もなき物なり仏法は本来
何不可得なり一切の相を離て尚心を見れは心は
まいらんや非の人心法にとらはるるを得んや一切法法を

身起より生れこの因縁をよろづく今世等大衆のなま
三界唯心と説給ところ
意 六根眼耳鼻舌身意乃六根の中にある意なり
分別より説文には意は志也とて志と云字に注せり
説文に注せはおもしろきに意と云意を探し
抑乃如しとあり言ハことばよりいへんとする事に
含く抑ふるの義也又憎何まいかのむかふ所にと注せり
識ハ志也と意細よ分かる事なり知するを説文へ云識ハ知也
と注せり憎録よい能別識すると又見識ことと注
せり情の字は識よ同

古今序にも此世七代時節人は情欲妄分秋歎集
作ると
又在京はおなく歌を情をうる詩を同すると是
毛詩情動於中而形於言と
孔紀茶進乳に俊進に仁直真は近情に
識注に情の字を識乃心之事也とも心ハ天地
まろうし情ハ草木含獣まおよすかふしのよれ
は情の字は書る而白きこと也とす書まかきくは
言葉の也に係行つらまい古今集をとりくして
みちびいて読む古今集にやまとうたはひとのこころを

としてよろしからんやうにかねてしたゝむるものときこえたれ

きてそのひきてせめるごとくさけ情の字なるてかへさまに

書語とよそ情の新ぬ先をいふる下乃小書は衣食

添之心添ふといふさけきは先生にこたへのな蕁也

新 洗句新也　朱氏曰新とは舊のきを華る乃潟

しと注せり

先洗文先は前進之途は注人の上なるをいふと注せり

花情まへ先てゝつく人の志を奪ふたのりと云説あり

情新とは地のるとは曲なりとも之こ新にとい荷

別れるとふまやまたけ注まへの末添出に求て添

せよと訓釈きりてま学者乃んめるて新きに

とは趣して今までのみの洗先賢の添吟し

つくとり情なれは後生の偏中よりいちる心の添

せさるは求めの心にきよ於てさる心を言た

其をふとはこれしんめるるまでふるして其の

さらめとしたてゝくやうまたりてもつてしるべし

あくしやうの情新とはこれはもしその心の志也

学者之是全中乃抱之情の字の編まけとなく

者立心偏とよく心の字にさんて書るもの後之

玉篇にも字書にて心偏とせんとを一新

まおもり申まてこゝろの情の字ハ心青しと字に作る
ことそ心ハ草木此年の色をもて青くきよらにやうな
心乃きよらなる所を云ふ人是ハあらかすあり是文物
何ら乾まく情ある心此物の形乃字文物の情を
うつし心直とは此和歌の素乃心をそらぬ心は心に
情乃心あやをなすなり
本より情は新しくあらすして情乃よしかくれなき
いかにも風情は新しくあらすして是風情とは
うまて風情といふて日著の向まて添へるにあり
ちとまかう情といふ人をすれて哀風景術の未来
洗ま成く是奥椒乃心得之風情新ま御出ハ人を付
新の成く加をは新見之此理と云ふ也

求人来添くん添し

此詞為乃時心にして此心ハ以て作意と云ふ子に
らんや此和歌に添をんとする時の道なき所まて思く
為と求め及ぶ境ま隣く新しく添をんとあるら
まことにいふへき人の作意に入つらひて以ちんと
おかふほと此作さなと謙まていふまへられさ
または人変御新まちつき人の年此詞とぬ者そ
とゝるかとも一ま思ふし給ふ御さく人の作さ

をしへて思遠きへし
こゝをもって詩の道の大事なり学者此意をよく
て情の部さへも及ひもすへからん故ニ古人の美
風美術哉ハ文雅情ニあらさる学者の思遠き
を申せり假令おもと新らくとて恐らく東の月ロ
此句あとゝいふんハおもてしきまなものをといへとも
かりにも風情のありけるなまめきて新しく
いふ一句のみにもあらく吟味して能く一句ことに
何れも八雲の沛梢ニ風情のいたりをさとす也
また是れは是ハおもわす詠しきともさん

とまるれはまたうしきこゝろしてあはれきこゆる
情ありける盛の一つの舞をよめるは老たる松の枝
らうたきにさえ見ゆるとたはやすきを舞ふを
月もしるんとするまつるまつり此ことをやたのしきの年は
廿郎花にさ茨の色をきくらし漢とえして君見へたまへし
ある白茨の色くへてもよろしき葉を茂りて君重と
や漢らとて妙しきまつりてまたるゝ人の情ありさ風情
の様世にまさることあるてうむかしの情あれこれ語りた
きれとこゝのこときるおかしきへまり海の底まて
へて月みるらんとよへいいとへとも若君は月やうらん

とよこうりしをの徳りきくのちさ就とはいりかると
いふ事を見して就ふらる集まる所のちとき
ちうらくあり
雲霞抄こつれは風乃くいくい前ても水ま万有ね亡光
其風情のいりかう就出一にする〈ささい〉にもて何ゆうの風情に
求くえりハきとまく〈かくは〉さりて思りをらくあれ
と思ふ事なし
（井桂）冨士就山す以し嘆まそやつかあるく田にあつく而て
物理とさきとをれて万のことあり。今（日難法師）近川流近将
荷後語云故大納言子えいは親とよせしは仔細に
覚の上人実作僧正にてくよかんさりいあり八九歳之池が
と云事と見とめ斉とこれは当蔵からそらえて候
かとま旧さ戸にてかひなしと云て池乃汀の所
つかとよ見いりし大納言自まへくは管が
乃斉芳まとりしらしいよいて昭る斉まらと殺へ
しとやされしか猿吉今しりし方いささて五代勅撰
まりひく斉数にひまくへく侍らい文のとさの
其外と細りて侍とうられ萬代集まて入侍
まさ（立）へらく一生之花の猿尾し
（八分之）向象のとまではららへくくるるしりまてまて琵なよ

珠しうきむとて為能らくも似りぬきはらしなきこ
雪大ゝしまう白い千比泳なれと冷とするいらろわる
千よおしかゝ叔乃山野のさむしろよおふと今のゝ
来いかり往文字乃くさりなしと頭り風雲草
木乃付よつまく変そうすくはたなりひて風情
きくりゝめよむさ、語し問ゆすかれとんのやうと
こゝうゝとゑり本懐なりを伝ちくけりむへ
かゝる此歌へんとなとすへき歌の中く其しき
まうものうまたしく千よむうしるとするいつや
んなれとし修つい彦つ中い路乃すいひて面白か

らすそ花ちくわつうなり

紙衣よ錦らんさく先とへいと見ん大ゆえせ閑よ一流
乃哲おり先達ぶ見つきよりつくとんをかくさせて
殆る本賀なり先哲をりつる作をなつてと人比類
く本文人乃帯ようろん在もちつ又月みくつうすふ
るうさくてうん閑とおかりくくはる叔物まとゐるを年
保旅乃跡よ本こゝろへい古しテ千よ

京山さ 大猿不時心搭若
勝地に 勝覚林天

伊川にいとは時のこと秋乃来てかなりしその浪なりける
と読るをとみて定家
いつはつる叔と見ハの山へしも空よかゝろく月乃[illegible]なる

まことしからぬ物乃ちからしくが流極し

我やどの梅乃立枝やみえつらん思ひの外に君がきませる（於遣迄盗賊）

とあるをいへる家にや

とへりし立枝は梅乃花をもとし匂ひをこめて云る家は

とりくべうらばまでにそよくるりたりけれは根かくして

いつまて作者のたゞ言にいさゝかの家云あるにはかりし

ことばあるべしけ是を同古事なれと旧つゞかる言にやぶ

情なしくやすきさとゝ紀ればまぎらゆべし花をも

またい立いくそらひあるへきことも其外は昔よりまたり

あて歌人をやそしかにうつくしくてきよくこそ人の本

乃ことろなりとぞ

詞以舊可用　詞不可出三代集先達之所用新古今古人歌同可用之

詞以旧可用といへる下に又詞不可出三代集とあり又新古今

古人歌可用之云々

大かた参差あるによりと只へしく一首理甚深なり

三代の外の三代集乃詞よりそ出るを人なる不可用と

書にまかれぬとて取りかく歌をみてよむひろくに凶

らなるきそくもりあつかひ定めし又三代集の外に詠出

本詞より以てその害を紀ゆるく詮無き事也

学ぶ人の為にはき詞をも除きさるべきにはあらずさて又新
古今古人詠ける所を用ひたるは三代集に准じたる詞のみ也
而後三代集よりおもへるは後の作者の思ひ入ところ
いかにはてある所にて濫觴を出せるなるべし
此新古今をもちゐらるる家にて古代の集とされは又
ここに新続古今まで三代集は時代の古今の
事をは取用ゐまじき三代集に限らるる家
の時代までは取り多く用之後拾遺より事は歌さへ後
うつりかはり遠論等は見るべき也も統
金葉詞花も千載は千載新古今は家に
万代なり三代集とされる句論は沢の詞をて今の

万代新続古今以後の撰集なりとし古人の歌を取て
ては新風へ詠まず多く用ひ之 凡詠のうち古きを好む乃
頃上の集に三代集まては一首詠ずる事あらば之を
以て読むは三代集の内にて[illegible]金葉詞花までは古風撰る
を要するはあんなる歌なる也世話に絶たるを後撰
千載集をも撰しられり以後金葉の風になりぬ事
の為中頃よりは新古今は専らに家の撰者の作り
志もとして古人の撰者もらくなる故家にのみ示され
流れを絶の勅撰ともかけて新勅撰集にえらび

新古今まては花やかなりしを新勅撰まては実に世も
つきまて為家又勅をうけて續後撰をえらひを
きこし此集玉葉風雅にして花実相兼たる学者
のたゝ歌よみの先達様也此三代の撰集は
家の三代集と称す此後又新千載新拾遺新後
普光園摂政殿御意にまかせて風雅にやおよひかたく
再和哥乃為知之撰是頓阿なとか也
而後二氏集にも見るへき歌すくなし是以詞乃さしくさ
されとも古しとりて作る人の道をこゝろさしあるは
其の詞しく感識深きもの也

凡世上乃人のよくゝ詞つゝきて哥人の心得るも
やさしくてやすらかなるの况和哥は詞少く字すくなし寔道かたし
うふを様ありてもいひなれたる詞のみなりてよむへし
やはらかなる詞をえらひて毎詞の清濁を云ひ
なる詞異なる名所の異名 此詞にて里乃景色にこ云ひたる
もみちをなかめていふ吉野 龍田山 立田川
いそとすてたまりと云と
惠雪院関白公 柚家 御詞にはやさしく詞は常
なかまんとおもふかつるは云なりたまへ僧都
昔嵯峨の若むらさきの花の衣たちのこころをかなしみ

とおのれ也云ゝ
よらずくの云ことにも非也ゆへ歌にならず　我身をとくに
ことしたりこれハ河原左大臣融公の云也んハ非也歌
ら我まゝあら〳〵と歌の也ゆへよしとも云らちそ也云
を用らんハそらにハ非也ゆへよ歌なら我也ゆへそれハ
あるうちとふんを同じまるゝみて儀を用也之
り此本まよくちられつきと仰せ也しなり
順徳院の百首ニ
新しいの道ハおもれぬ境にかけり乃波能義の義によま
五句ハ此新造風体始出来以らさま新歌に今夜同以
○風躰者效塔能先達之秀歌　不論古今遠近見宜歌二数ニ示
風歌ハ上行下效これを風と云となり
體流文よ月之政務也　鄭玄云体之形ハ成之文質
や
愚問貫注云漢魏唐各一体創之歌し
風体変ずへきや。荅云漢朝ハ敵をとりてほして来
とらるゆへに風と体を得とゝ心得て子孫文体へ伝
よからずり日の国ハ天神地祇乃御末国の皇統ととく
先皇乃道と成りる故ニ歌の体大よ不変するて
好ままや但今て時の上人乃所好まそこらて也ゆへに御

たゞむかしはまりとりて
此流より風雅乃ことばにて
ある人と云問と云ことあるに別乃なる事あるへしとて
ま風雅と云はいかなることばを云てあれは是にて一身に
心さまあんなる容なり始にさ庭より衣裳まで
おもてむきも人のおのれ用ひ一盃の酒の事に
かりより此趣ニさハ事人乃心ろもて見たまさらて物之され
風雅ハ少しと心十年乃紀伝此ハ問風雅の三種の心に
奥せられハ許にくはしくへりけれ
あれは又に后のは人の上ゑまたらへ此十年かりハ人の容
容問て奥ハ口に一段くよく心て是ハて乃もろもろきて
ありさま人の上までの風雅乃十分なるをあり是ぞ又問ハ
問のある人さ阿まあり奥ハ奥乃存のまにありて是
一段を嘉世の風雅ハちと心えつらしく事也奥まてかう
人問のある事を如何になりつきなりして面白うる事あり
是を風雅のおなる也これハ人乃雪鉢乃事生れ風雅
とさて高く十意の言ハ人まかてハ起居するまいの風
衣裳をもとよりやさしくきよらにしさもやさしくして
むさとしきおせハ言すかるまして此奥まてありてこそ
中にたしもかりて出し出家まとりてハ威儀の

又或ハ仲子乃申されし勝の威儀とて優波離
乃威儀にかなひたる又談話にかなひていふ僧是を僧
侶ハ是を俗と行跡にも実用あるへし判風流なるへし
其ハ風流ある一乃事也
滑稽ある一戯ス風流のあまりより出る風流也されハ元来
に害ある事なき也字音訓王ハさして多口
までハ世しを為気つまる風流行ひまうしを
いさゝか申されしまてなくて世に用られも元来に害
なりて世を話頭也
虎とのミもちられしに昔より云ふ鼠乃やうなる世中
と滑稽ともありこれハ
東方朔か語に用之則為虎不用則為鼠とこれを
さわり人乃事まへりて称風流にしてあるむへきなるを致
ハ毛詩に云治世乃世の音は安うして以て楽む其政和ら
世乃音ハ怨くいかり然ま乖りといへり衰へ以て亡世
乃威衰にいたりたる事なり戦国ハ称すへき然るに衰
然るにつきハおこり来れもいまし風流にさしくみ
へきことや
代々の様集ともく諸家乃事にそしておつかりて元来
の世然威衰にもなりへきならし治まれる世の声は音の

ましてたのしむの自然よりなりいでしものなれはこそなほ流れ
く宗祇翁門にえらびとりて物といへるをもつて其事
を本とせるよしみえ侍ることし哉誹諧の句こそらくなる
りきぬ詠吟するにふれてもうたふる道は今までこれ
哉は有にとつよ性ある人の道情のよはく合刹の道
それゆゑ祇公は後鳥羽院に生れて歌文道心本道情
百年あまりにこそ見えし道にしくはなきやうなる事なし
何况身を以て乃喜はなき世に何をのぞみにしまく
志き姿なるにはあらぬ道なり 但当世又いかにかなる
俗難とされもけしからぬあり清らかにいつまでも乱るるなる

詞は心を別をぬるにあるといひ得乃なきもまたはけしなき
難とくるなり是先君がいへるなりと家の百首も
ありまたかくてとなり世に入門の屋風の中より
高作は誠へのいへとしなりし此理は道にといはれし人も
ていうありあるへきことにや
されは又いかなるを風雅乃ありきとは言たがれと雨中の
とてここ家に十七年もの雅号と称して此風雅のおもかげ
時歌の道かるひかりとも其を一とて雨中吟と号せしも
あり此雨中吟と号するも猶あるなることとの事の中に
まことは先にしるしき目をとりて雨まじりゆる鞍乃

うち寄り蔦のうれ葉をとりつゝあそびて風よりひく村雨
冬もなく雪ふしきのみ山乃よの道
さ十七をハ東京紀五十そらし姿らひきりのよふ
くれまれくしうしいをくうる所なんあるうそく九年
まいまくうてられし変ちりまとして婦乃風雅なり
京極黄門よりえ方執口伝言んに称く同志ならんは
ありて同じ路すゝとかゝりんの趣をうたひしと同路の為は
言乃もとめんとなりかへきや
幽玄風体物言新古今にして面白き集なり読人乃
今はよもりのかへむ人もそのく集と見んもすいそれ
何ゝきへ言とも

うち寄り蔦のうれ葉をとりつゝさ言風雅集へすり
乃ちやもりくの為に風雅なしくうえんあせるとも何か
よきなる我をりの為其は伏見院つ和言と指南しされ
時只聞ともつらしくといふかりしを此境なるゝ学芸
能思量すへし

秀歌といふは言まで取ての上乃文をみえ此難から
よ依て公しく談註し所謂堪能乃先達なしを
くゝ自証して言と添出るすハ彼達ともくされハ本をする

まことにいつ多にて只まなり

又堪能乃先達なれども毎度に歌よみ得るへきにあらす
能さる故に堪能乃先達は歌よみになる人と見え
大切乃事なし
唐人は詩一首にても其義の境まて知らすは叶はす
我朝日本は習ひては一旦歌詠ありといへとも其の歌
道なる故人には堪能とも先達とも申さぬこと多く
なりて歌は大方はこれにてこそ三種なれ
先堪能と申はいかなるにも人より先に其能を発して芸
用ひとなすへきの事なり堪能に先達とは申なり又

一首上を見し芸用と達者にとかく申すへきは先哲の道
実に儀して習ひ得乃ちからなき人は是れ全先達また
何事にもよらす堪能ならぬ先達なる故人あり
先達なれとも堪能ならぬ人てきいふてあること也ニとも思ふ
ならしおほしなくて又歌よみに習へしといつもなくて又一首も
堪能ありて先達なる人は皆ほと歌よみならぬ
をいてきゐるすちの弟子にて先達と見ゆる習ひへきまし
堪能ありて先達なる人の手本にて歌道の詩にも眼
ようやうやく習ひてこそ見ゆる習ひへき歌の何とも別きて
へきそと歌は此頃よる歌過によつて歸き見直さへき

されはこそ歌よむ人とへいふは上古中古いまはかはる
趣きなれは此道の事とは末学後生の眼をてらすを
してみるけれとも皆此奥の有様をも今に変
へくの悪きれる是なり此事に手本を見るへき
ここには学者の用心なり此奥の事を見る人と
なりとも心に能く聞きとれとも事は物を事に付て古歌
気分のうらに紙きよきの趣の事并風雅にあらす
まるることの一面むすむ心にとも心もしき人の上に
生れ風流なる俳諧なる人の夷なる身に付
おかしの本ならうてうまされは一遍てそうかな
ちていふ人のわか事し

不浄なる風雅にてしかも源氏のふくよの物かたり
風雅らしといふ人へきこゆる心も清まれると一気なり
風雅下数し秀事とは大切の趣也
数胡数ノ切作ノ働通作ノ勧数ある人偏にて句の流なり
乃文との悪く力なく書く
似てもあさき事へてよき事はよめとて其ていてき事乳やう
定まる門の物を事にみえてもんなるよけ花の趣
拾之ふ人は発語のてをし堪能の耳きくおもふ
各別之事はよくよめるとても心に志ある人あるへし 箋

猿しかるをもしらぬ人は筆にまかせてかけり 此琵琶抄に
猿ゆるひかりとはんに秀歌を書てとゞまる其
序なりて次の句をは此歌ことばきさゝらしをる
人もさる人のうたよりてかはへをもむきを
わかて歌をよみをへきなり其にて涂をもみらき
詞をかりてをんにつくるべし

不論古今遠近見宜歌可致甚術

歌の心し
為家卿云歌の姿はまり詞をしるをいひくたし清く
聞ゆるをよろしきにとりて同じ風情をまでわろくつけつ

きはあるよりも一首栽末にかゝる事と雖も
ることはれて其をんなる事上句と下にある其上
またつてをかゝる所に上字といゝも同じ歌に
うつをる人ってかきことは三字二字にも申は
いらて卅一字のしきをこゝ同て百まつむいよ
きるとしつきてしらるゝ涂あるへからん
いわゆるいろつゝ聲と歌よ年いまして意いふれを
此今柄子字ありてあくはやと歯とり難けり危さ
まよまゆかしくて孫ぞはを
いなくの子ら其紀翰有まて下雪いて宗か記かを

よき言と聞なはことみを詠まむしき歌に
（後拾遺）はしくれぬ人ていゆらぬ人こそは此歌のあしの思ひとりしれ
（詞花和歌）こくられいらぬ人すると此集七の哥にまきあらし此歌どもぞ
（ほのぼのは）上句此とつさいにてゆつくりと云ゆるなり
又言省のうちは当代よりて今此言はけしきことを
大方此歌りのは肉とにさとむてて云ふれとらくよめ
此言とくは寛平以往すしいて情多りし歌たり
後代まで甚後後拾遺顕輔後成などは心つき姿よ
まりて由十分りまて人の上古此まことに後世い
此其姿をこのとよむつきまうれしこる言とて詞
ありさまつまでにりきる事あるきおなり和言はあるべてき人
まよき言はしたくるときにゆうらしけらききいはれ

近代之人所詠出之心詞雖一句以上除弁之
七八字十年之人不詠出之詞節
不可取用之
是らの歌のんと云詞と云風此とけせしてては歌の奥
義ハ捨まてりとれらつハ欲重宣此義而説偈言と
此頌又まるめくさ重て此義を宣んと欲て而偈
を説て言と云るぬ心を新しく我身ら歌
此詞にいらきれとまいは当代乃人の心詞にて点つる

へき事なり。宜しく浅くは歌の詞此時代の好みなりて新
別にせるをは能く前家の如し人の語りと拾ふても
てよき出たる詞にもある用るは盗賊とは心得て事
物をとる物なれば他人の物にて古代をとらば昔の事を
言は古の語は七八十年前此人の事にも学びて割
きりこれか割の詞をとるとや
難波の葦の夜は波しらすまかりなる朧月夜は
新たて桜かた山は花の雲とて井手の玉川
ふるさる此詞の句も昔は誰もそれも用る歌の詞
は新し今の世の事ましてもらす古の眼をもよそにて

見ことかれぬてよけれとも
三盗三易とてすなはち先三盗とはよみ様を
同じくしてもちいる詞のうすく又三易とは
沉隠侯曰文章當従三易易見事一也易識字
二也易讀誦三也と云こ玉屑七
わく二乃七八十年よりの前の歌は学ぶべしと学
建保四年よ拾遺愚草に撰し給ひし事北にいへく
これ崇徳院の御代天治大治の比なりといへとも
此へ革なり
定家卿二条院應保二年壬午年に誕生なり此

抑愚昧の若年よりこのみをもてられし老後のます
く貞応元年壬午六十一歳彼年之後ちかき
不論今案を用へからすといへとも
八雲御抄部乃中にまかるゝ人の言葉にまかす見え
ところすくなからすとも候

此事先人のいひおきてしもの書紀にも准之あれ
しき詞ともいひ出しけるをとりかへしや御きき
ましにやもとくとわろくとりなしていひつたへ侍る
言葉詞も耳なれぬもの言葉もむまきたる後代
までいつまでもなからん勘へてまいりてたまはりや

よろつ事までもかんきいひたる大事なりされはこそ春記
立田姫山の紅葉の錦乃種なりといひやまぬ詞を二句つき
いひそへしかはいひし物に文字二三字まで申されはかならずしき
（をとろかし）きこえ紅葉の下ふみわきてと詠みて二三句しつきて
かへりてよめるたくひ之て侍るをそれを別る之雅経か
あまたしかるいのとよみしかうしも家隆の家のたくひまで
いはん山風を読いふて例りとて家雅もなき二文字
まてといふへし耳なれふつやなるてきとなるへかりき
凡雅経はよき歌人にてありしも後京極摂政の人の言
にしたがひていはれけることにやとおもひて延暦

の御時哥合の時有家のすゑの書やかすみてく清
ゐしは浮定の時ことにおもしろく盛しけれは崗
院七月よりそれ詠しりしは其以のやすけれに
かりてりやかて見えけりいかなる事にや雖経
さしも有家はやさしく思ふ経の哥よみえけれて
しるきなみなかりけるにて其乃人あれしくとかくもら
そそろかに一乃やさしき老知るそのあはれくとやす
いろ哥なきは我あつらしくかんめてなると思えてよ
むつかしき定信朝臣なと常まもしすあり其は雖
又たのみねともかのつれをえりのは殊哥はよみえてこそ

しるよしもなく謌はきこえし

又後鳥羽院順徳院　御製に

甲斐がねは山の姿も埋れて雪は半またかゝるしら雪
とこそ京極摂政は山のすがた建保のころの哥として雲
見きてや侍れは後京極摂政乃哥よ
きこゆるも詠ぬるはつきぬ秋山の姿にかゝるしら雲
乃哥之　基定の歌
秋こえて[illegible]秋風もなく吹に[illegible]乃杜
[illegible]秋風もなく　近世秋哥なとこそ

新勅撰に

白雲乃もに照りしのぶらくは秋風ちらし川萬る
此哥詠るおもて　これらに書くかりつまうつしく
りつ花よそへる哥そかをきむ事は袖にやよ時雨に
乃さくひき事なりしある詞也

於古今人歌者多以其同詞詠之是為流例

・りきまへ八代の人のよみ出たん詞と取用まじき
ものを制を

・此條ちらい古今以前人のよみやうに明らかなるべし
古人のよみ方は三代集以後の作者に於ても全く萬葉の作
者までにかぎらん
文治以来いづれも古歌によりて詠し見えしもの多く
取用ゆる事道綽也とよし
顕河の本意は後拾遺集にて申し時奇　堀川院百
首作者も後拾遺集にて今来ところなりと
八雲御抄にも見えたり其後百首作者も今ならぬ
同作者の人の詞によりて詠しをかへるに取
へるまや詠方にも近世先達歌に引用後還
八雲　しありよ年よみてさる人は古今の
古今にところ事也一説大かたに上手はいかにも　上手は
古今能取あり　或は詞を取てんをかへるなり　故也

心をかねて物に替ることあり　或は詞にかねて風情にかへ
さらに加り風情になるも尤なるへしとそ

心を寄て物に替るとは

古今
月夜よし夜よしと人につけやらは来てふに似たり待たすしもあらす

拾遺
我宿の梅さきたりとつけやらは来といふに似たり散りぬともよし

是は心を詞にかへて梅になすらへけり

おかし

詞を寄て心にかなふに至らす姿やさしく

あくてかはりかたくよろつにかはる

イ
人とはゝ吉野の峯の桜ともみえけれとさつきのみゆる

とふを

里人のことは夏野のしけくともかれ行君にあはさらめやは

とあり

行川の底さへ花の色まさる我恋ちんをやめんとかなし

とふを

白玉と見えしをかへて行川の橋の色まさるへし

とあり

須磨の海人のしほやき衣をさをあらみまとをにあれや君かきまさぬ

とふを

伊勢の海のしほやき衣なれたるを

これは

玉だれのまどやかなきて夜の衣袖をしかれハむなしきたまきぬ

といふを

光る事を夜として紛らかすなり

玉簾のうちのまどやくらのまの衣かさねあはれや君ほかもまうさね

錦繍の衣乃たるしるせるを付くるめの光りき しるまからん

といふを

むさし野にさける山の井のあさくとはいはれなる

なれり

三夏山にすみてかけひの音聞しは嵐しる夜もやさしからん

ゆふまくれ桜くる里はむかしいまの恋をかなしみかなり

吉野川ありて川音ハくれつる大和路を行て見る

さすむしくいさよひつりそこな吉野川をかひて恋しき物を

右は首皆萬葉乃同き詞をあけり古事也

夜さりに中はみかしいふをかつきたるも来とて涌つつる

といふを 備様也

流るるも中にたるまをらとしてて涌えてしき夜もやたるる

此類数多し

上古は哥中古は哥とつらねかれし 近代又たかをかたりて

見て心さえ毎事さく是を知からと注まて我ら心得

しかるに三月也とは花乃盛也文好む人つとひ遊ぶ時と云
ともに我力のみにて一つもしる能はぬ事を詠すと云も
ぬるがなれる事也文学者の心得へき事なるべし
雪埋老樹寒山径 猗猗千載一叢態と云は横川が乃
猗猗千載一叢態とされたる是等の奇句は殊の外
也一字ごとにかゝる所吾が作乃句とする上手の手柄也
八月梅也と云詩ありて云字は是ぞ秋乃詩に
春白矣 秋白 得 横斜疎影 梅之人ごとなりし詩もと
今乃世の人は此国のことを悟る不ぞ知るべし
其の建仁寺十如院僧三益周年か作之

五嫌径路草萋々 自古幽棲遠市朝 公道世間唯白
髪 貴人頭上不曾饒 と云し山谷の
胡為陳師道 白髪三千丈と廿八字にて十字まで文
吟味ある文好むと云り
杜子美の 渭北春天樹 江東日暮雲 と云るを
寄る 平原秋樹色 沙麓暮濤声 と云るは
まうふかきにはかに云りとかなふ事を言ふ
近代後様の詠もやうやくとを歌をいひ
と称す何ばかり云まゝしまなかりきと云し
東三条右大臣の
当代並まれなる梅のむかしをしてかゝる人達よくいかやと

といふを見て

年よりて老となりぬれば今は花の香にあきつるや

とよるかたやうき世のならし

誓乃悲みより世の雪消ゆ山里のみを見しる哉

といふ句を

誓乃君より出る悲みは上よりくる紙継のかた

とはいへ此句は思ひとりこれを是は句とは作ばかり

ならしり説はなうへるし

九古今とるなる歌よりもこれ非也是は一句

なるをとりつくし清くは古詠なるへしや思ひて

末代の人は非句非詞も読つらねて其の詞もしく

き詞なくして其れをはやしくとなる句落人ほか

ありける歌もしに古来乃きちなる也とて万葉の

初めてをきたる詞古今にて此度あて上人をいふか

かくのごとく詠よりといひて夜とかくもなきん古今の

いふ也九古今乃詞にとる詠先達難きなるにや是は

今の俳諧は連歌の上古今にとるを制まで

は誹古今にとるを清作は（のすきあるまよりてやかすをとるなり）標骨とるなり

古人乃心を用ゆいこれ正記して云に是をいふ

いふを信なり其の古人の意を用ゆ是れ仏を

是まで一意上下数工となへけるとや
讃物に本歌と取合にて縁ありなき歌とも有る
前栽と古今にてとりいれとし背い縁よかんな
正治建仁の比より盛なりしをさまざま是を沙汰し給ひし
一 春まで紅やら華奈花は何と何の貌まてて上下まじまり
（新撰犬筑波下）せつ花乃けまれるは花は花乃ゆふさにをなの心をさいまの風
あつてこそかゝりん中いとふれるものぞわいさ後のことゝをとまる
名取川ふら乃日数ハ何れぞ花の咲きあむた花埋木
名乃はうの埋木あらはれていつまでもなきわびとぞ思ん
つれなきは花の浅茅のうらさもらし常盤の秋の深紅
かさらめのなみ春の末の木をてけりてふるゝへの道まき
まのよ花もまの名残身かわくとめてむりはなしときぬらん
桜さかそりのたれ我まで山のはるの花雨かさまあてゝ見
大なる花と花の流風わすはし松そのいかも埋む雪
いさこそやひのまへ大とく花との浜松まちこえひなりん
たをやめの袖まかりよへを花の風にてうつりて花風うけて
見あやうに花袖のたへをかすみ風物にとめてとうつ行
ちとせの子のかざし花桜さ咲まかり袖のまつうる電
山姫の袖の山の花のひさしき世の思ひ添へき
見人まゝあらすなやせ者のきの中党まへなやあらすむまの月

ひきて何とすみて老人の恋しくらたやさこそやさおもふらん

一 寄草花を取て風情なきつる

家隆 きのふこそやさきこりゆく浮るならりわりて野すすきの月

ささよふるかしにけやかかりしさきつらり川ちつ乃うつ岐

雪乃うち梅さしいまたふる雪に松の葉白きなかきの山

松の枝に年ふる雪のうち色をそくるもいまた雲をもつ

すかふえちてこそちれ行れ夜もものちらし花人の宿

さそうちもの山へはてもむきてそこそこと見(?)終りて尤

花かくや霜枝のさしおもて衣をつき揺りて狭ん

ちりそむる衣をうつきこうひとやかしまつの宮居の稲妻

萩の花(花)まちてまちて千とせ尤鬼上乃うちまひれかるや浜

なくまもの野への秋萩ちるまらこさうちうかんするへかまま

きつくや若なりしふりうしいくちん藩の尾乃秋のゆくられ

おりしわうは藩の尾の揺てしうれしゆき初まつ袖をうてし

妙草尤尾乃月色さびしさて初人しゆの野への枯尤

年ともにくきふらし墨と出くいあもいさ深草野とやかあ

一 寄年に宿答二つの旅

みすまり川難波の名尤曙まへあれなて月とふかみれ

んあんかまてんきしや津の国乃難波つるの名尤よしきと

消るくまてやと山と揺ちんいるかつむ時て淡雪そと一つれ

峯の浮やは月乃ひかりのうつろふも岐のむかしに移ハ分にけり

常よ木にまかれてつる葉の色みえ秋なるらん

卯花乃まがきハ雪のごとくにて月ぬる月の影やそふらん

夏乃よハまだ宵ながらあけぬるを雲のいづくに月やどるらん

天乃川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ

天の川浅瀬しら浪たどりつつわたりはてねば年まてこえまて

久方乃中なる河のうかひ舟いかにちぎりて闇をまつらん

久かたの中におひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる

川舟ハ夜ハこえてと岸のうらぬさ乃山風乃も

少女子ハさかしき山をみてたのむよるはこしをやまる夜

霞たつ月もいくたびの春をへてかはる鶯乃音

なきつゝそ春をおしつゝ夜の雨に花ぞいくたび

さきちりハ花見よりけうち江ゆき霜を枝にてる門

山里ハものゝさびしきことこそあれ世のうきよりハすみよかりけり

人とはゞ見ずとやいはむ玉津島かすむ入江の春のあけぼの

玉津嶋よくみていませあをによしならなる人の待とハゞいかに

一とせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

ありつねをとよみ紀

大空の月のひかりしきよければかげ見し水ぞまづこほりける

照もせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき

こまとめて袖うちはらふかけもなし佐野のわたりの雪の夕暮
織まなき雨のふるひる家にゐてなかむれは
高砂の尾上の鐘のおとすなり積りそめぬる松のしら雪
松風のおとたにたかさこの尾上の鐘のおとそふけゆく
瀧川いかにせんとか雨をふる人をとらん
みなの川をれはいかにせんとあひに物せん
秋の夜すさみてかれはてゝたえしをと手折そつまなき
堀江漕ぐ舟小舟漕ぎてつまやこひわたる
やよりもかれの萩の上葉に清き袖の色さそひて
秋乃田のかりほの庵に露はしけし秋萩にまかせ
露乃袖の分て露かゝりて身はたゝ秋風そふく
さそふ人乃袖ゝふれなはそむ人もひとつきにしも
かすみを分来の雲の玉物されは露にぬれ
たちゐるわかをの玉物かさのこゝろはかけされはあり
あきたつ夜中よりかれ乃葉にはかへる秋の夜はのかせ
山里はゆく月のかけのあきも早くゆきゆきしに
かね音たりひし雲のはたり山のつき雪夜
高橋の山は結ひとむるかへりとなりて
一詞一をとるうたの歌
後世くるしみたいはとてなをたまかりをはかりそん

ねつてこそ見ならけん中ゝにもえ遠なるをたのもしきにこそ
しら雲をちらすていつ山さくらもちらてしか花盛して
かんちのくものまくやまさきを見れとたへぬ思ひしてゆくえそしらぬ
此歌ハ詞ともあしくよめる歌なれとも
朝日かけ白雪山のみねつゝきてさく花の雪とそみゆる
なきりかいつる月のなかめてをとこにまかせて
まかきの道しやすらふ春の花のしるしの
白雲は色のうつくしき秋のいろもきえぬもそむる
秋くれは月まつ人の気色にむかふとそ
こゝまてはひとのこゝろをたまきはる命にこそいはひやまめ
ゆくすゑのこゝろにまかせ雲まよふ月にそまかする
思ひ出つるかくれなき人の命をまつ
一本歌二首をとりいてゝよめる歌
ちるといふてはなのかけはしやまさくら
くもりなき月のかけにもよのなかのはかなきこゝろ
花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきにこひんとかみし
さりとてはをしむはなをとめかねつ世中
大かたはけふそあすそしなかめせし花のちるをみるとの
但取古歌添新歌事五句之中及三句者頗過分歟

一、哥二句ニ上三四字先として於あらし
但乃字を完ヒ知ても哥ハ古今新古ヒ沙用ありあ添
流例ありといへりとはいへとも哥の作者の古今ヒ文ひと云ふ
これ数られ道として異の句と雅定まる事也とく歌へ
ヒ猶先ヒ是てとゝ伝句讀古今新古ありハ沙用ま
そて長乃例ましくと意申すよ時もかへ是ら宜しくもの
。是乃如しことをなれる義州能流の教也
ゆての用やかにやら能れそ
当し中及三る哥頗過ぎ古絲気
業り乃句二十一字乃あヒ二句を以上のるハ余

歌乃れを句讀乃すうこ
二句ニ上三四字あるこ
低令霧形黄門詠ま
阿悪の山さくらとを見れハ明て花ちりかり濃にまかりん
本哥ハ若菜ま
何乃悪乃山桜ヒ明を規て猿猶見ヒ雅ろこもる
右これハ二句ニ上三字あれり
同詠哥ま
弁妙れを我黒髪りしら糸のことハ佛新古ヒ之れつ
、本哥ら後撰ま

時に道義黒髪を白川の水にそゝぎ一尺を墜となる
様あるし
は象眼を付へし
八雲につゞきつらしく見えしにちさくこれにならひしに
して教へし詞しるき也さび乃竈之
夜日休八百練して字にあり千練せしく色にて候を得
洋玉屑にみえたり 古今集に季練炊よて
練月燭之 楽しけると序にみえたり 貫之いぞ
を十日廿日に書しとぞ 頃阿法師よむに二の様を
付る〳〵

一 よりて道の便とすべき雅頌の教には此心
にて三味に文あらくんば兼歌の如とするにまかせて人のよ
きさる所を要へしやすく出来しかるべし沅思也
をもんばかるはれ此六人作者集に百首を及らは
まく明り花山僧正 東宮廿御本院中納言忠辯
すべの集乃千に絶なり 殿富門院大輔は千載
ほくよみしとて百首大輔と千載にのせ世に誰
百首よまされ人はいふべき歌の詞 拍子をやくめて
も紀千ならん出来せざるか
一 文歌とりて事くぬ頭にたよ清くいとやへある

ゆかれ月の御吉ハよくよそに何のかへりみもなし

以聞す詠古歌同類無念歌　以花詠花　以首詠月　以字歌詠

並難歌以並難歌字歌（詠）字歌花を時当取古歌難歌

何しりの山郭公　見ぬうしのつらし郭公

しきさうの川の桂　新ゆくやさう

玉かこ郭公の人

年乃内ニ春ハきにけり　月やあらぬ春やむかし

桜ちる木の下風　花ちる金隆何度不隆し　あらしとつらし郭公

花郭隆ニ句文不入詠く

以聞す詠古今同類無念　以花詠む　以月詠月

同すこそかふるとそ此まて以花詠む首詠月と字

以花之詠義ハ以意詠意ハ以難詠難同す之
（注）此作ハ花ハ梅花の事也其内の時代殊外義勢ちやそて定家卿の歌ま此下日

大空ハ梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

（本歌）照もせすくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物そなき

（本歌）散上りて梅さへにほふ春ハまた霞ぬかくる

（本歌）花のうへの山路郭公花ゆへ人をまつ

花の書立つかくや五月雨の林かり山乃郭公きえ

（本歌）積まりてつまき立ちそん時郭公詠らひ山まさ取字ゝ

此歌ハ勝十字を書て此歌ハ徴令

夕されば夏野の草をくるそつけてつまさら

一 と云事を古今続点乃字に
里人のことは夏野のしげくともかれにし君にあはさらめやは
河しま続山にもも続たまほく続点あんをやまむめらは
といふ事を古今点之
つたえしと云のひとつく[illegible]河しま続山にもも続きまきゐやし
もちゐ事の心をはせいとおほく山乃まへ続きおほ[illegible]
一 といふ事し古と
諸事続もかころ山の井続きたるま別ありうる
ここま業続け物のかくしつま軽しやあるへしこれは花に
詠花以月に詠月す霞夕月あれたるは之如何ある乎
とのをかくさらは古今とある事の本に定まれは故に定歌
といふいこそとて割をるまはかうたる也問以とて
かの義まてまつ也と故にて詠ちんは古今とある〔まかさ
おほろへしとや
一
以四季歌詠並雑歌以並雑歌詠四季歌為之時
是取古歌之雑歌
此時本歌と取つきあらはいやまとめる也とや
ひとつの枝さきこりとつるは心るはさりて安めえらし
とみをと
様うし其うしと人まつきやらんこそすまはくり向たたしとかし

あさ日の登るにつれて峯まてる月乃かゝりたる岳と山とにして
といふを
翌日親の高き山にさそはれて遠く消えぬ雪のうちを
あはれ時めける秋のよその我かまへなる流れなりけり
といふを定家卿 秋十五夜 内裏歌合に月を
侍つ(い)さ度ある暮雲乃山にて見れは月乃秋なる
我為乃梅乃ちかひやみえもつゝめる我かまへ意きまちせる
といふに支考 老境 閑居 漸く 霞中 梅を
ひとしきさ(ち)之は梅の花之をこそ色さこそ立意見て
古典といふ詞によりてめつらかのよき事ひとつ是非
能乃事ゝいたさるゝをいかゝして詞のかゝりをとゝなふ
あるへけれ
常観会古歌之意風一深ん
いはらうは等の我修行によりて観之はならう意也我性
界と常我宝可付眼
意気ある心の妙変詞我妙変せは限りなく詞の妙にて
まして妙変乃風情なり
古道の妙我思へき事は一段寛平の代の事いはる
さて詞あるまし情なきの事何いつもの恋
「連乃義まてかゝる事は只此一段也

一袋草紙　後撰云撰すへきかたなる古歌に添すへし漬ま
いかさまにも是ぞ当世流行京都作者（自分中よりまする
てあつるよ此当下立ちかへり篇（新しき言によりまんと
おもふ一あか房説立して
浪のよるかれ秋も乗いさこに仍て所見之世間
と吟して〳〵とかむさんしてつぎれんくうりかる是）日称蔥
僧都言是行云續済語のよらかれいとてきもひ帰一つ
其人恍ちり湖をて身の何じとみて如意説こそ
舟の江のさら波と吟したらうちえ仏法修の作んで
ていと高てをば其八不十楽の音かとし何そのされ

からし後拾遺若西町抄に載す歩むて又ながらの音をとよ
定むらん此また何ひとら古音に吟したる事云と
又云中山集説云一段乃ある言よ詠みの言葉歎ちん
手向ま云はきさくかりてかもとこそといひしとひしくしえ
なれ
殊下見習着少今伊勢物語後撰拾遺三十六人集と
同殊上の歌下懸ん八九貫之　忠岑　伊勢　小町　かまれ
一湛能く達とやつるまつる
さ能こそ歌と詠もつて其也其言えにては此とかきとてと
一あれ文言まては和歌とも其下ある事是花鳥風月

〽の上の一の首まで除しかんとねらひて書ぬのさはなるは
書きよしとも見えたるを也けるに也と見えけるまゝとあれ
而してなく古今の集に歴と云はこのまゝ何るゝなれども也
見えたるきへの書は畑を記してあるもにえのあるへの書は
錦まで叙と云ふる撰之なりのしきのへ普之国の
撰改の後よまる字は学は准添なきれてし又中さえき
いかなるへし和歌乃広ものと云ふいきゆるへ(ることし
きて伝られる也仮名の歌をそらして何にる晃創た
あれとも准も三千一字のくるまゝのあれて大のあとく
撰ちのきて和哥然してけ掛まて云るしすて叙と論する

今も見ゆるは叶もきてのあるにはけ紙の勝ちと
云字にてかへり詩書百家の書を所中して弾更見
搦(ことほは古今伊勢物語源氏拾遺(とと云)これにはほ
乃字まて広もまなくてのと云ふ義と名判とへし
井 更伊勢物語惟喬に云国也院殿の頃に流行といかにて
みなまいにせてきるゝなるすといふて拝面歌なきてとは添日
乃すと和哥の道(とと云ふ)。それ古今後撰の中に伊勢
(云書あり一流に古今の前に花の集也後撰は意の集也これ花の集之花)
物語とも云ふ。伊勢物語の序てる物かれは花実と云ひ和合
まて古との沢にまて云流あり不同をみ流のんにて
伊勢物語は時代古今にもなほ家然物かれしく古今は

此歌の真義なきにより先師一人の事とされたり伊勢物語
は此代にさしき物語なれは清撰抄にも是を注せ
られけるにや其二ヶを置くなり

三十六人集之内

三十六人集とは藤公任卿撰せらるゝ集也そこに於て
人の中より清撰し義いさゝかも不足なく三十六人の中
より上下を分かち歌字をつくらせられし也此段に隣の字二つあり
歌字を此んをつくへきなしくての隣さしの字間干
要なり中より隣を古今伊勢物語しるしてて乃
隣の字にて三十六人集いふまでも一通りに此書されたる
三十六人集は隣歌の奇を以て述とこその奇ならぬ
第にこれよは清ゑ人丸貫之是等伊勢中務其
外に此歌の奇とする所哥の本なりて此撰此
そして撰修の先達乃奇歌なりて然るを当今見る
て此清まて人をとも多く此といて此於三人を一家也
なるにても此乃学は源ある事也
東宮院関白云 摂家 御説 頗の字は甚後 後成
所偏 清偏 ありまへきのよし也
雑帖知歌之先達時茂之卿気世云感義為知
物中白氏文集第一第二帖常可握歌 深通和哥之人

時節気象を先達して對して只今も幾何とおなじき
ふんを弥よ引へる抑時節乃気象世に之れ盛衰にて
あらはれ和やの蝶いつまでもなき有情も時節気象
世にして盛衰なり出る時節の気象と云ふ雪月花
鳥のこえいやまで及ばず彼の寒夕紅葉山川草木乃
をんなの色とつきまとふ花さも是いを盛に生ま
得すなるいを盛と生ずるこれ時節の気象なり継
ほかなり
（兼倶作）神道大意にいはく心は一念にして是ん地境に於る
故に天地に盛なれは天地の気象を育す故に
草木に盛なれは草木乃気象を育す故に畜類
人なれは畜類乃気象を育す故に絶へに盛なれは絶へ
乃気象を育す故に富貴て目鬼に餓鬼（飯）餓鬼
は心乃貧窮し他なりすべて他に盛なるに出家に猶
あつてらしらに時節乃気象貯へなるい仏法のと
まりまや浄土の荘厳のみとりくつきてあらはさへ
桜とさゝりは昔今樹林乃夕紅色深くおりさえ
上品蓮臺乃暁の楽とぞ况人身にてわかくはやみ在
法乃語に欲せは佛性の理を須らく観す時節因縁の孔
吾人はひとのみなかくばねさらひりのくわやのくりよきやと

名残の哀さにつくへき折からなりこれを

取持との

鶯のなきせる梢をなく春の花のさかりには花のちる

いまはなく親合まつてやまの秋ならの花ふかくして

ぬ秋雨にあはぬ東風にしほれしきに今人の眼は名

斜にして時節の東風にほには時節の方よりも見て

人乃楼台も紅へさくらしいもゆる葉手嫩嬌親王

わかくとさくれてうつくしい恩ふかし

花をて草りしもかすそせし秋の花をなにしみれかくま

人の栽蒔して首にへける方まく

くれしらは秋なき附やさかしく花をそちゐ根さくはちや

く若川の月華にゆ手に

菊乃ひくさらそろ衣をうつりとそいつれかく時

・とふりは日の影をほつく流されさて時の御門

五十七年なき世なりし内しられても風にあしかりか

とここ

流人すらるを創業大すあるそ されは時世

に時花まる風乃内へ入るる西日や泉水おも

さ国深東に時年然かなし然浄へあらなにし秋

山も今なく気にもしかりしく世なき御成りて

鶯めくるせる梢然君の上ちて東にゆをつもてさらしけれ

とすへかりしはそ家をも離りして附合の附方にし

世間盛衰

芭蕉作者此躰に至てはなや世間さへかはれる事あり
皆前句へ文句へ入るものにして来らへみに有不得
家乃境を走て天か心にて此前後を見る皆々人
乃上にうつりあらすゆへに小部の家を化するたくひ
・人乃眼前乃ふり様に歌人乃年中の見ゆるなるへし
歌乃詠より世乃此國盛衰の観念よりうれしき事
・言ひは美れをはなるるく唯意一念にしてこれにより
外明伝法に随意あるかをすて我は三十一字の上に
法之乃宣理にして又其外乃大道理にしてくらへうなり
無常を観するものを先言乃根源としけれはなや撰集の
中にはいつも無常此歌をあつめ集は数後に為るかな
・れは無常ありとはいふまでもなくかはりてこれも盛衰に義ることに
かなしてゆゆしくなれあるの事なり古くからまたも撰者此外
衆によりて盛衰に輔にまかせくりを集しあり又読を
撰ばせて盛衰を中央に入る集もあり和哥乃
本意此由にも集まりの善政とも申へ載るにや又國衰
いへよかさなるへきも書表の白月情風佳懐寛
めの知にいたるは事あるて此理に思ひこふすへしとは

ざりまうして意也これをたのむ心は一事なや

為知物由

物猶疑又物之事也と注せり

大学 物有本末事有終始

又致知格物と云は致知在格物と訓せり

その注にもいふて事と云へきなりとありて

これ皆物の字は事と訓する證據也

定家乃仮名もて書様なる本なり

身のうしとおもひされとも逍遥院いてものうしとあるは

されしとて称名院の由あり

さし道は仮名の字ちとなしと出して人しゆつきぬてそして

よ覚えて人呼ましきのんて蓮法和尚も然しに由註り

白氏文集 居易字は楽天と云て白唐の代乃すくれたる人なり

詩文をあつめたる集也

白氏文集と云は流散あり 白氏長慶集と云なり

東林寺 聖善寺 南寺の箱に納めし集也と

なおまた巻の数多かりけり

今こくは世間ニ用る所乃白氏文集は七十巻なりして

総計二千五百九十四首也

一 第一第二帙 帙ハ宇治文庫の本也とあり 慶乃本ハ帙ハ

次序也と注あり

第一帙 七巻 三百三十首

第二帙 七巻 八百七十二首 第一第二帙ともにはなし

第三帙 七巻 六百十五首 一帙各七巻つゝにて十帙あり

一 白氏文集第一第二帙といふは第一の巻より第廿の巻

にいたりて八律乃詩なし此内に 楽府 琵琶行

長恨歌まてあり 王昭君 上陽人 陵園妾

にし此内よりも撰ひて文集よりとらんは字下勘すなり也

凡平天文ハやさしくして解しかたき故まつく

和字に訳して通をもしいふや

一 常下揀叙といふた者は叙されたるつきのもの正叙の深く

和哥乃心を通しもしれる古人激して文集を不断讀に

辞ふとよみてあり源氏を角の巻また連の俳て契一所

さくら文集に源為と字あり嫁すいんを勤くと云

て此形の字文思を通をなす故に大綱に併年にもよむの大概

になりすものし

一 此能に係る院の御流を演説和歌にも通時花京気

とらん 白氏文集一常下揀叙とくして之に一統て

かくまで誹て記ことと書は世良薬気に世間の盛衰
にも知乃世にあらんまで白氏文集も一も二も快尤肝心
なるならん但師説乃なき二派にいたりてこそや
和歌無師匠只以旧歌為師深心於詞花説達者
誰人不詠之哉
此俳諧は遊戯にて和哥抄大きなる目にも日本の吉
今此気にも説き金て心深くことにも其師
道なる絶なるて上代の俳諧の派添抄波の肴にして千年
てこの俳諧に於て始末にもなり和哥には紀貫以後の法
界なされたる人の数もあるにのみされは易きにあらずて
難く難きにして易ケも俳界は入ぬ道に路りやすき
成るに和哥の其の数もはてなき法あるは法あるまじ
ならずに警師の上にも驚きといふも是やといふ日に之為
さしてまのして法方にまさりといふて言ふ此まさに業に
ほそらては庶民にいたすも一かくの上手が擬する時
道とこれに節験にもる是人の数の私を一つにも数々
別待ぞ其人の路にも数るされなき古のありくとし
今の世流にかくのごとき処世たらすてもそこにあらはゆく人の紅白用済ませと法あまりともいはるる所にてもあるなり
までも人の世流の及はぬ俳界此むき道されは和哥にも
添するは人乃たゆる世の人の数もよくかうされはやく
俳諧なれとも子孫にて是れにつくるも師道風雷

あれとし孟子又天然にとゝまん堯の子に堯に似ぬもあり
又藍より出て藍をまさるもあり又は不肖なれ共
子のやうを出すもありはからひなる紀性界なり
荘子に斉の桓公が書を読とき輪扁と云車つくりが
桓公に問て何をよみ給ふぞと桓公のいはく聖人
文とて古人の作りを紀たる物也輪扁曰さらば浅ましき
物也言詞はありとも元意は其人の心にあるなれハ古
人の糟粕（サウハク）也我車を作るに様々の故実あり去ともしんは
いはうへけれとも子に教ゆるに問つけても今にて
我身にいふまてもなく心に帰もの也くるしき所也

車は我とのあたりにかゝる物也中々もつて定まれるや
なけれハ人にも教る詞なくして我七十にあまるまで
子にもつたへる事もならずして今（こそ）猶みつから輪を作りし
然は聖人の心のよし紀しても行へきやうにもあらねハ
いかなる教もつたへられうるにもあらねハ筆にのせて
あらはし深きこゝろをもつたへてあきらかにまなふへき
たからしとこそ
八雲御抄に詞はふるく和哥は大聖文殊の御知恵より
あらはれたる事也然に只歸一孔方（ホウ）に生る風情人
の我まゝなるによて一切乃義理にかゝはる師匠に逢て学

まむかしよれはたゞ一色乃ことばとぞいふべきなるとや

篇歌の師

昔といふ宗匠の時はさすがにさこそ其名にさえて
して寛永年乃中に合三代集中にそを向といふべき
能因　長能か宜まろて和清能因は和哥も
何やうまて論代も能は
山かうも落く異本能集いのいまうまてそれてつるべき
哉流了ともいう是を師匠とすべきと

深きお古風

及ぬまでも其学ぶ乃むつかしき所を古哥好み事来たる
観念してといふことを何も和哥好むものは此の語や

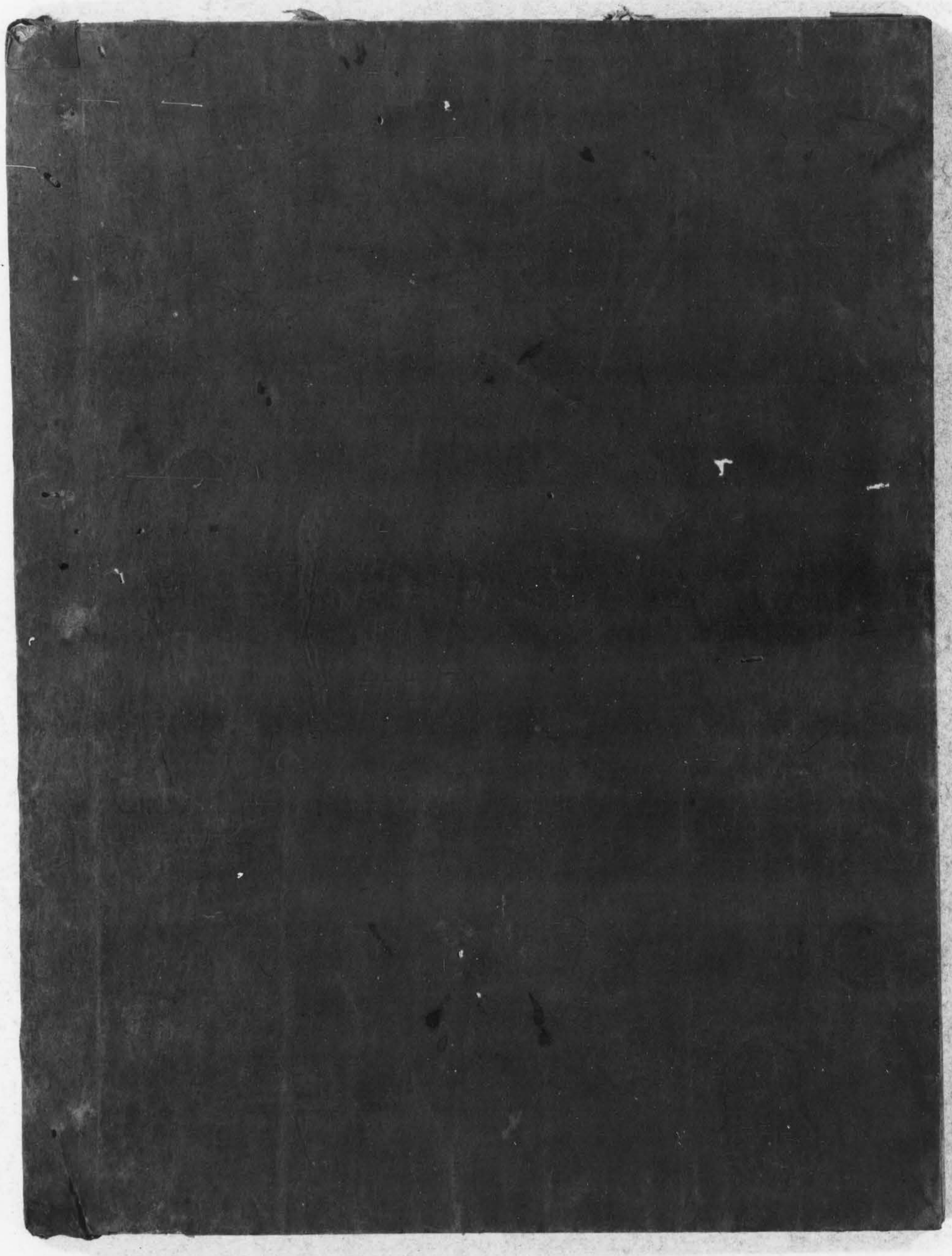
習詞の先達

此家不富あるまじからぬ上の門は和哥と師匠はなしとも云
くく又こゝに門に先達まで習ふといふ所は語相違
まかりとまれ門に先達と相伝師匠なり
とあらしを師流なり
師流に安心してもあれ参禅もしてあれ我ん流ものは
自ら其まて落居せし師の東三迄測すべき事
きはまん抄乃中乃見ひつと知へきに此流必志出きて

不すハ師近なとさたり術かりてよろしき。
。亦る上にて師乃せんさを募く以うさうしおうかくさいこ
習乃字ハ鳥則学習すと云ありて数日と書たる
字之にて能わきましつされは習ふ時ハ此習の字之
論語ニ学而時習之と云是也

考歌之師大略

・此大略と云ハ源氏大概とか云る物也考哥ハ根
ありとて此百哥首ハ大略と申なり
此内古哥乃哥あるハ古今集幽玄論せさるとりしき
哥を見るへきといふる大略也

河菴毛時学し覚悟書連て古今和哥指籍其格歌
耄 洗文五年多年あるを耄と云となり
由礼ニ云八十九年あるを耄と云となり
昧 字治ニ闇や不明也となり

九州大學圖書印